

# 少しでも集団に適應できる子をめざして

山 口 隆 司

H児は、現在小学部6年生である。身辺処理機能はかなり高いが、多動児、自閉症児と医師の診断が示すように、衝動的で集団不適應であること、情緒が不安定で対人関係上のトラブルも多いこと、また、善悪の判断がつかないことなど多くの問題を持った子であり、情緒・社会性の面が著しく劣っている。そこで、情緒の安定を図っていかせながら、H児が先生や友達と一緒に生活していくことができる子になってほしいと願いつつ、指導に取り組んでいくことにした。

## 1. 指導の方針

ア H児との積極的に関わりを持ち、信頼関係を結ぶ。

集団生活の第一歩は、教師とのレポート作りから始まる。レポートがとれると、指示に従って行動することが多くなり、集団の輪を広げていくことも期待できる。また、情緒の安定にもつながると考える。

イ 情緒が不安定になる原因を追求し、H児の不安を取り除いていく。

H児は、情緒が不安定になると、攻撃がほとんど物や人に向けられる。そこで、その原因について探り、不安を少しでも取り除いていき、そういう場面を減らしていきながら集団参加させていかなければならない。

ウ 好きな遊びや作業を通して、集中力、持続力を養う。

じっとしていることが少ないH児であるので、H児が好きな遊びや作業、パズル、ビデオ、音楽を聞くことなどを通して、少しでも長い時間一定の対象に集中して取り組むようにさせる。

エ 生活のリズムを身につける。

これは、人間が心身共に成長していく上で欠かせないことである。H児は、一貫性のある目的をもった行動ができないので、生活にメリハリをつけさせることが大切である。徐々に、自由な時間を制限する方向へともっていきたい。

オ、家庭、医師との連携をとる。

H児を指導していく場合、学校における教育だけでなく、医学的見解を聞いたり、家庭の協力体制をとったりしていきながら進めていくことが重要である。

以上、5つの指導方針を立て、実践にとりかかった。

## 2. 取り組みとその経過

4月から9月までの月ごとの指導内容とそれに伴う本児の集団参加（情緒面も含めて）の様子を述べてみることにする。9月までとした理由については、後で触れたい。

|     | 指 導 内 容  | 本 児 の 様 子  |
|-----|--|--|
| 4 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本児とできるだけ多く接する機会を設ける。甘える仕ぐさをするので、母親とのスキンシップを多く図るように家庭に要請。</li> <li>○ 集団の中に入るよう誘いかけはするが無理強いしない。</li> <li>○ 対人、対物に対して問題行動（物をこわす、投げる、人を叩く）をとった時、してはいけないことだと言いつけさせるがそれが危険な行動に及んだ場合、厳しく注意する。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 単独行動が目立ったが、徐々に教師を受け入れて、遊んだり話したりできるようになってきた。指示に従った行動は、なかなかとれない。</li> <li>○ 無理に入れようとする、物を投げたり、奇声をあげて飛び出したりすることが何度か見られた。その時の気分によって参加したり、しなかったりの繰り返しだった。</li> <li>○ 言い聞かせても、またすることもあり、あまり効果がみられなかった。厳しく注意すると、必ずパニックが起こった。問題行動をとる原因については、本児に聞いてもほとんど答えず、注目を浴びたくてわざとやっているようにも見られるし、欲求不満の解消としているようにも見られた。</li> </ul>   |
| 5 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 徐々に指示に従って行動できるようにさせる。朝の会までの時間をパズル、ビデオなど教室内で過ごさせるようにし、集中力を養うと共に、気分の安定を図る。学校を休んだ後は落ち着きが見られなくなるので、よほど体調が悪い時以外は、なるべく休ませないよう家庭に連絡する。</li> <li>○ 問題行動をとった時、必ずその原因を聞くようにする。物の場合、元の位置に片付けさせるように、人の場合、あやまりに行くようにさせた。注意の仕方を、厳しくならない程度に、またあまり長時間かけてしないように配慮した。このことは、家庭にも連絡をとり、協力してもらうことにした。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 中旬ごろからクラスでの学習には、落ち着いて参加できるようになってきたが、合同学習など人数が多くなると、集団から離れがちだった。(例1)<br/>運動会、校内宿泊(クラス)には、大体きまり良く参加した。(例2)</li> <li>○ 物の場合は、厳しく注意された時、自分の要求が満たされなかった時、周りが騒がしくなった時、投げたりした後の物の音を楽しんでいる時であった。人の場合は、自分が邪魔されたと思った時、人の声がうるさいと感じた時、いたずらをして反応を楽しんでいる時であった。対人への接し方について、世話をしたり、手助けするような方向にもっていこうとしたが、あまり効果がなかった。</li> </ul> |

(例1) 合同カレー作り

第1回 (調理室)

材料を切る時、とても集中し、差し出すとどんどん切る。洗いまでは、みんなと一緒に行動するが、それが終わると、調理室を出たり入ったり。洗った材料をなべの中に入れるため、順番を待っている時、A子がH児のボールを持ったと言って中味を散らかす。カレーを食べ終わると、足があついと行って外に出る。片付けをする時、コップを数回投げる。

第2回 (生活訓練棟前の広場)

2日休んだこと、参観者があったことで終始落ち着かず。材料の皮をむいたり、切ったりする時、数回皮むき器を投げるが、あとは上手にさっさと仕事をやりとげる。それが終わると、この日暑かったせいもあるのかその場を離れてうろうろ。食べる時に

参加。おかわりしたいと言うので他の先生に頼むよう指示したところ、さらを投げ逃げる。

(例2) 校内宿泊学習

ほとんど教師の指示に従って行動する。物を投げたりということもあまりなく落ち着いていた。カレー作りでは、他学級の先生が手伝いに来られてから急にそわそわし、お盆をたたいたり、カレールーを投げたりすることがあったが、それまでは、とても集中してがんばった。特に食後の片付けは、他学級の先生と一緒に根気良く食器洗い等していた。



|   |  |  |
|---|--|--|
| <p>6 月</p>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教育実習が始まり、教生の先生が来られることを事前に何回も本児に告げる。教生の先生が授業するまでは、1対1で行動し、気分の安定を図らせ、授業に参加させる。</li> <li>○ 問題行動をとる前に教師に言うてくるよう約束させる。落ち着いて生活できた時、十分誉めたり、がんばり賞を与えたりする。本児の学校での様子を見にきてもらうよう家庭に連絡する。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 前半は、落ち着きがなく参加したりしなかったりであったが、後半水遊びが単元に入り、水が大好きな本児、楽しそうに参加していた。少年自然の家での校外学習には、きまり良く参加した。</li> <li>○ 教師とのラポートが大分とれるようになってきて、事前に言えるようになり問題行動をとる回数は減っていたが、陰で時々することがあった。がんばり賞を楽しみにしていたが、我慢しきれず物にあたることもあった。</li> </ul>           |
| <p>7 月</p>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ プール学習があることを事前に知らせるを楽しみにさせる。朝の会が始まるまでは、他の子と離して静かな環境のもとで、音楽を聞く、なぞり書きをする、迷路遊びをするなどさせる。</li> <li>○ 虫に興味を示していたので、対象を虫に取り向けるようにさせる。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ プール学習は、午前中であったが、それまでは比較的落ち着いて参加した。しかし、午後になるともっと入りたかったのか、落ち着かなくなることが多かった。たなばた発表会では、出し物を最後までがんばってしていた。(例3)</li> <li>○ 虫取りに熱中したのは、良かったが、取った虫を投げたり、水の中に入れて遊んだりしていた。小動物への接し方を指導するが、口では悪いことだと言いながらもほとんど理解していない様子だった。</li> </ul> |
| <p>(例3) たなばた発表会 (プレイルーム)</p>  |  |  |
| <p>沢山の人々が来られていたが、最初のうちは、先生と一緒にきまり良く劇を見たり、話を聞いたりしていた。30分間ほどして急にそわそわし始め、発表会が終わるまで計3回以外に出た。出し物大きなかぶの劇で、さるの役を演じ、歌もみんなの前で声を出して歌った。</p> |  |  |
| <p>9 月</p>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 休み明けで徐々に学校生活に慣れさせようとしたが、運動会の練習が始まる頃から急に落ち着きがなくなり、集団から</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ とにかく、周りがるさい、○○が見た、先生に注意されたと言っては、物を投げる、友達を叩く、先生の机の中の物</li> </ul>   |



離して和室で1対1の指導をとる。しかし、和室の中でも落ち着きがなく、外に出ては、周囲を困らせることが続いたので、医師、家庭と話し合いを持ち、一時家庭療養に専念させる。

を勝手に取るといった行動が目立った。急変した原因については学校全体のざわつき、家庭環境の変化（父親の入院、母親が接する時間が多くなった）などが想像され、H児が極度の緊張状態に陥ったのではないかと思う。

### 3. 反省と今後の課題

なるべく余分な刺激を取るようにし、情緒の安定を図りながら、集団から離したり入れたりの繰り返しであった感じがしている。集団参加の面では、レポート作りに専念した結果、教師がそばについていれば、比較的落ち着いてしかもできるだけ長く集団の中で取り組めるようになってきた。対人・対物攻撃行動は、原因を探り回数は減少してきたものの（ただし、一学期の終わりにであるが）、未解決のままである。情緒の発達と社会性の発達とは、密接な関連があると言いつつも両者をうまくからめた指導法が見出せるに至らず、模索の日々を送ったように感じている。



H児は、現在家庭療養を終え、12月から学校に復帰し、一週間ほど生活した。H児の指導がふり出しに戻ったとは言えるが、H児が楽しくみんなと一緒に生活していけることを目指して、今後さらに家庭と医師との連携を密にとり、H児に無理のないよう根気良く指導を続けていきたいと考えている。